

適期収穫と適正な乾燥

で総仕上げ!

令和3年9月2日

長岡農業普及指導センター
稲作情報 No.8

電話 0258-38-2554

E-mail ngt111440@pref.niigata.lg.jp

- 刈り遅れとならないよう適期収穫を行い、籾水分等に応じた乾燥とていねいな調製で高品質米に仕上げましょう。
 - 早生品種は、8月上旬までの高温で「胴割粒」が発生しやすい状態と推定され、また、「基部未熟粒」の発生が懸念されます。
 - コシヒカリなどでは、8月9～10日の強風により「着色粒」などの原因となる変色籾が見られます。
- 稲わら・籾がらは10月中旬までにすき込みましょう。

1 収穫適期は黄化籾の割合が85～90%の時期

(1) 黄化籾割合を確認し、適期収穫

- ア 早生品種では、7月下旬から8月上旬の猛暑による「胴割粒」が発生しやすい状態と推定され、また、収穫前の調査によると刈り遅れによる「基部未熟粒」の増加が懸念される。
- イ 8月10日以降の低温少照で登熟が緩慢となっているため、青未熟粒が混入しないよう早刈りを防ぐ。
- ウ 「出穂期と収穫適期の予想(下表)」をめやすとして刈取計画を立て、必ずほ場ごとの籾の黄化状況を確認し、黄化籾の割合が85～90%程度になった時期に収穫する。

表 品種別出穂期と収穫適期の予想

品種名	出穂期(出穂期の幅)	積算気温	収穫適期のめやす※
こしいぶき	7月24日(7/23～29)	925℃	8月28日(8/27～9/3)
コシヒカリ(移植)	8月3日(8/2～6)	1000℃	9月12日(9/11～16)
新之助	8月9日(8/7～11)	1,050～1,100℃	9月23～25日(9/20～27)
あきだわら	8月8日(8/7～9)	1,050～1,100℃	9月21～24日(9/20～25)

・9月1日までの気温は本年値(長岡アメダスデータ)、9月2日以降は気象庁「向こう2週間・1か月の予測資料」に基づいて算出。

・積算気温表は普及指導センターホームページに最新情報を掲載します。

(<https://www.pref.niigata.lg.jp/site/fukyu-top/>)

(2) 「変色粳」による品質低下の防止

- ア 8月9～10日の強風により、褐変による変色粳が見られる。変色粳が多いと、不稔、登熟不良による未熟粒、着色粒が多くなり、収量や品質を低下させる。
- イ 着色粒は収穫時期が遅れるほど増加するので、刈り遅れないよう収穫する。

(3) 適正な乾燥で収穫後の胴割れ防止

- ア 刈り遅れなどほ場段階で胴割れが想定される場合は、毎時乾燥速度が0.5%以下になるよう乾燥温度を低く設定する。
- イ 降雨後の収穫など粳水分が高い場合は、できるだけ早く通風し、生粳の変質を防止するとともに、乾燥温度を低く設定する。
- ウ フェーン時は、湿度が急激に低下するため、乾燥機の設定より乾燥が早くなる。このような場合は、日中は常温通風のみとし、加温は夜間に気温が下がってからとする。
- エ また、フェーン時、収穫直後の粳水分が既に18%程度まで低下している場合は、水分のばらつきが大きく、乾燥中の胴割れの危険がある。このため、軽く通風循環した後、半日程度貯留して水分ムラを解消してから加熱乾燥する。

(4) 1.9 mm以上のふるい目や色彩選別機の活用

- 未熟粒や着色粒などが多い場合は、調製時の流量を少なくする。また、必要に応じて1.9mm以上のふるい目や色彩選別機で調製し、整粒歩合を高めて1等級の品位に仕上げる。

2 稲わらの秋すき込みで土づくり

- (1) 稲わらの秋すき込みは、堆肥施用と同等の土づくり効果が期待できる。
- (2) 稲わらは、地温の高い10月中旬までにすき込みを行い、土壤微生物による分解を促す。稲わらと土壌を混和するため、5～10 cm程度に浅く耕うんする。
- (3) ケイ酸、リン酸が不足しているほ場では、土壤分析・診断に基づいて土づくり資材を施用するとともに、稲わらの秋すき込みを行い、効果的・経済的な土づくりに努める。

3 粳がら施用でケイ酸供給

- (1) 粳がらはケイ酸を約20%含む有用資源であり、土壌を膨軟化する効果もある。収量540kg/10aのほ場から得られる粳がら(約130kg/10a)をすき込み還元すると、ケイカルを約80～100kg/10a散布したのと同様の効果が期待できる。
- (2) 施用量は「各ほ場から得られた粳がらの量」を基本とする。
- (3) ごま葉枯病、稲こうじ病、墨黒穂病が多発生したほ場の粳がらは伝染源となる可能性があるため施用しない。また、雑草種子が多量に混入したものも施用しない。